

六花

RIKIWA

6

俳句雑誌りつか

2015（平成27年）

cover design Yuna Mizuno



こん
今

生まれかほり

山田六甲

水中花少し寄せおき机拭く

群衆の顔にひらきぬ大花火

昼顔に室津千軒しづかなる

空深く杉のありたる滝詣

糸口をメロンの網に見つからず

ヤットサーヤットサー阿波のぞめきの三下りさんさか

明けやらで踊り団扇の踏まれあり

すげ替への鼻緒を腰に阿波をどり

阿波踊り浮き名流しの橋の上

母みさ女死去8月29日午後四時十五分

秋雨に嗚咽すまいぞ弟よ

もう母の生まれかはりや秋の虻

虫の家に戻りてみれば文の山

うす月に絹を吐きたる芒かな

雪嶺抄

螢火

笹村 政子

螢^{ぼうつたる}を待つ間の水田明りかな
螢火のひとつ点りし藪の奥
亀鳴くや水子地歳を暮れのこし
亀鳴いてをみなの髪を匂はしむ
つなぎたき人の手遠く螢狩
水漬きつつ螢心地のゆらめけり
水音に平家ぼたるの離れざる
闇うれし草に沈める恋ぼたる
螢火に広がりゆける視界かな
別れ来て夏の北斗を眩しめり

筍に差し入り来たる光かな

住田千代子

たかなにさしりきたるひかりかな すみだちよこ

筍に差し入り来たる光がな
筍を貰うて糠の見当ちず
ただ風の音がゆくのみ竹の秋
竹秋や戻げる時を輝きて
花栗を鼻が探してゐたるかな

俳句はこれで充分。余分な物を足さず、余分な物を引かずである。「木洩れ日」とか「日矢」とか気取らなかつたのもいい。光りは生命の根源なのに、筍は光りや空気に触れるとアクがでる。それは人間の都合。この句だれにも解る言葉で見える様に簡潔に詠っており、しかも堂々としている。「筍」は俳句をしない読者には馴染みの薄い漢字だが、「たけのこ」のこと。竹の子を一字で表せば「筍」で竹冠に「旬」。旬とは十日間の意味。十日間で伸びるといふほど成長が早いからとも。また筍はあきらかに象形文字。旬の説明は要らないだろう。あとは味わうだけである。光りの角度も見える。

雪卿集

花とべら

佐津のぼる

袋掛^{たけのこ}け風の騒げる枝の中
筍^{たけのこ}を剥きながら九九聞いてやる
花とべら波の騒ぎは沖にのみ
整列の瞳が黒揚羽追つてをり
桑の実や舌を見せ合ふ女の子

夏の蝶

永田万年青

後ろからつまみ捕らるる夏の蝶
筍を二つに割れば節^あ現るる
牛蛙池の四方をゆさぶりぬ
くちなしの花に近づく漢かな
梅雨晴間母子と出会ふ池の前

雪卿集

春椎茸

志方 章子

切り落す春椎茸の太き足
セルを着し母うつくしき古写真
子供の日きのふ来し子の忘れ物
届きたる枇杷の産毛のうひうひし
突堤も釣人も夏霞かな

徐 脈

松本文一郎

五月雨るる机の整理抄らず
春夕焼先行き憂ふ徐脈じよみやくかな
菖蒲池色の付きたる風渡る
天辺の枇杷は烏に呉れてやる
方途なきことの気儘な水母かな

雪樹集

蛍

藤生不二男

たましひの闇にともりし蛍火は
わたくしを誘ふのはたれ蛍川
音もなく闇の流るる蛍かな
月光を浴ぶる片おも蛍橋
人形のことりと動く蛍かな

半夏生

田尻勝子

五月雨や真鯉の背の黒光
牛蛙鳴きて水面を眠とうす
黒揚羽睦み飛びゐて華やげる
白杖を案内す魚屋の半夏生
鈴虫の仔のそそくさとそそくさと

蛍雪譚

六甲選

※調子は効果的に破れ、

二十七年九月号鑑賞

俳句作品を詠むモチベーションは何か、について以前にも書いた。それぞれに特定の読者を意識して、その人がどのような評価や感想を持つてくれるか、に因るところが大きい。結社の場合は主宰に評価して欲しいのが第一かと思う。が、主宰ばかりでなく、意識する人、つまり恋する人や、愛する人、仲間、ライバルなど様々でいい。本当は「たった一人の読者」がいればそれで幸せて、そのことがモチベーションにつながる。モチベーションとは動機とか、行動を起こす直接の原因などの意味。そのモチベーションをコントロール出来ないといけないとも言われ、一瞬の動機・発心も大切だがその持続をどうするかにも掛かっている。「たった一人の」と言ったが、「たった一言の」読者がやる気を起こしてくれる場合も多い。一言とは「佳いでも悪い」でもいい。自らに目を向けてくれる人がいいのである。以前政子が「主宰は今、どの作家に注目していますか」と私に訊いた。間髪を入れず「笹村政子」と応えた。彼女は今脱皮の途中、蟬と言えば羽化の大切な瞬間である。眼を放すわけにはいかない。翅の一部でも抜けきれなかつたら、羽は歪んで飛べない。話を戻すが、彼女が私に質問したかったのは俳句を「あなたは誰から学びうとしていたのですか、何処へ向かおうとしているのですか」と質問したかったのだろう。「誰に学ぶ」かも重要であるが「学び方」が大

変重要である。学ぶは真似ぶだが、それはとても狭い学び方。広い学び方とは、すなわち骨法を学ぶのが重要。私は今の俳句作家から学ぶ必要を感じていない。飯尾宗祇や蕪村、芭蕉、子規、虚子、年尾、澄雄から学べばいいと思う。だから俳壇で何が起っているか、興味が無い。それより六花の仲間が何処まで達しているかを注意深く見守っている。弟子の句を見るのが俳句を詠む最大のモチベーション。吉本興行の社長ではないが「かかつてこの気持。さてその熟読者の一人で、私の最大の注目作家笹村政子の作品から読み解く。

蛩を待つ間の水田明りかな

笹村 政子

蛩は闇が降りてきて薄闇に飛ぶのが面白く、たいていその場面を詠もうとする。が、それを待つのも、乱舞が終わって帰る時も蛩狩りの楽しみ。飛び始めるまでの期待感、終わってからの余韻、それぞれに趣がある。この句は期待に満ちておりながら、今か今かと焦ることなく、蛩を待つ間にも、水田明かりを楽しむ余裕がいい。これは年齢の熟し方によるところが大きいのだろうか、このようなゆとりこそ俳句の遊び心。

蛩火のひとつ点りし藪の奥

〃

いよいよ薄暗くなって蛩の出現。上がる直前の緞帳の向こうから、役者の声か唄が聞こえて来たような幕開けの心踊る瞬間。蛩狩りのプロローグの一灯は点されたのだ。「あつ蛩！」と思わず声が出たのだと思う。一緒に来ている人からも「本当だ！」と声が上がって喜びの共有が始まったのである。それは舞台に注目する観客と同じ。〈以下略〉



六花集

九月号



平居 濤子

五月雨にぬれつつ供花を切りにけり
森深くかけし巢箱を見にゆかん
骨ばれる父の胡座や桜桃忌
昂りながら大輪の薔薇を剪る
立葵咲かすカメラ屋三代目

江見 巖

豆はじくビールの泡の弾けをり
あぢさゐや豆腐ハンバーグのとうふ亭
おぼけ屋敷帯の緩みし浴衣かな
マネキンの顔のほころぶ夏ファッショ
ン
団塊の世代の法事ほととぎす

延川五十昭

潮風に夏蝶渡る小道かな
雨上がり薄日の中の黒揚羽
パーマ屋の古き看板梅雨の蝶
夏蝶の群がつてゐる古木かな
ゆらゆらと風を煽いで大揚羽